

◆養徳社工ツセイ賞一等入選作

あたたかいもの

橋 本 旬 乃



神様が作った美しい曲線がとても好きだ。

私はたいしたものも持ち合わせていないから、
尚更美しいと思うのかもしれない。

人間が作った完璧な直線たちは、いつもただ
無機質に私を見下ろしていたが、その中にあ
たかさがあると近頃思うのだ。ちょうど彼のよ
うに、それはいつも分厚いから、なかなか気づ
かないのだけれど。

小さな履きつぶされたスリッパ。淡白なネ
イビーと単調なデザインがあのひとのその無頓
着さを見事に表していると思う。

大体のことは急にやってきて、頭を駆け巡っ
てはすぐにどこかへと行ってしまふ。

あのひとの足音も急にやってくるが、頭の中
の一番奥のところに真っ直ぐやってくるのだ。
もう少しだけでいいから準備させてほしい、と
いつも思うのだが、にわかにやってくるあのひ
とのそれは、私の世界の音たちをもっと繊細に
して、たつぶりの響きを与えてくれるから、い
つもやっぱりそれがいい、と思う。

グレーのカーペットが敷き詰まった部屋で、

橋本旬乃（はしもと・ときの）

22歳／天理教教会本部勤務／天理市在住

「名誉ある先生に選定いただき、大変うれしく思います。
驚きのあまり、真っ先に母にこのことを伝えました。はじめ関心を持たない様子でしたが、賞金の話をした途端、声色を変えて褒めてくれました。文章と日本語の美しさを教えてくれた姉に感謝します」



あのひとは私の頭の中までやって来た。周りの人たちはたいてい明るくふるまっていたのだが、あのひとはなんだかふてくされたような、いつも

もなにかに疲れているような空気をまとった人だったから私は何ともぎょっとして、少し構えてしまった。

あのひとの声は私の思うそのように少し籠っていたが、もっと丸っこくて、あたたかかった。

「ちょっとお願いがあるんだけど、いいかな」

グレーのコンクリートみたいなフリーズが、どっぴりパステルカラーのインクに浸かったみたいで何だか

滑稽で、でもとてもいとおしい、と思った。

昔から気持ちを伝えるのに苦労する人間だった。気持ちというのは厄介で、自由自在に変化して私のむねに現れる。言いたいことも思っていることも山ほどあるのに、みんなが心の中から出てきたがつて、ぎゅうぎゅうになって、結局誰も出られなくなるのだ。心中おしくらまんじゅう、そんなところだ。中学生の頃、ある詩の中の「心のダムにせきとめられ よどみ 渦まき せめぎあい」という言葉に出会ったときは、この詩人には生涯及ばないだろう、と悟ったのを鮮明に覚えている。

そんなこんなで、いつも私の「心のダム」はよどんでいて、なんとも億劫だったが、知らないうちにある種のひらき直りのようなものが降ってきて、そこからは考える事をやめてしまった、いい意味で。もしくは、気持ちとやらがむ

ねの中に行きつく前に言葉にして出している。
私の事を単純な人間と思っている人が少なからずいるとすれば、わたしのある種才能ともいえる、「ひらき直り作戦」は成功しているのかも知れない。

ただ、あのひとを前にするといつもより沢山の気持ちや言葉とやらが一気に押し寄せる、ちょうど「心のダム」がまだいっぱい時のよう。私はいつも気持ちを整理するので精一杯になる。みんな、我こそが、と言わんばかりにむねから出ようとするから、それらをすごい速さのベルトコンベヤーに順に並べて、むねから喉を通して口先まで送る。

私は非常に凡ミスが多い性分なので（ただの言い訳にすぎず立派なミスかも知れない）、もちろんこんな非常事態には必ず完璧に対応できない。どん詰まりの中、かろうじて現れてカバ

ーを試みる言葉たちが、「アッ」とか「えっと」といった、音なのだ（もちろんカバーにはなっていないかったのだが）。

そんなことで、気持ちは私をてんやわんやさせておきながら、あの人がいなくなる途端に、一気に冷気のようなものになって押し寄せて、火照った心を冷まそうとする。ちょうど波が押し寄せてひいていくあの瞬間のよう。それはすこし心地よいが、通例、特別な余韻まで冷やしてしまうので、沢山の無表情な気持ちたちが代わって顔をだす。それらに出くわした途端、なんというか、いたたまれない気持ちになるのだ。罪悪感とか、自戒の念のようなもの。父と二人きりの部屋に漂う空気みたいなもの。

私の周りの人たちはたいいていのことからっぱに笑ったが、あのひとはたいいてい何もないような顔をしていた。別にきいていない素振りで

もないし、つまらなそうにするわけでもないのだが。

五時をまわって皆ぼつぼつと帰りだした。

頭の中から聞こえてくる。

「今度こそは話しかけなくっちゃ、うずうずしていたって何にもならないでしょう」

私は言う。

「そんなこと分かっているし、今朝だってさっきだって今だって明日だって思っているんだから。こんどこそは頑張るよ」

「聞き飽きたわ、そのセリフ。耳にタコが出来ちゃってますますみつともないじゃない。昨日だって同じこと言っていたじゃない」

「好き勝手言うておくれよ。君はいいな、いつだって私の頭の隅の方に隠れちゃうんだから、あのひとを目の前にする私の身にもなってほしいよ」

好きというのはなんて厄介なのだろう。伝えるのはこんなにも難しいのに、自分の中に抑えておくのはもっと難しい。

そんな気も知らずにどこから聞こえる。

「私だってたまには同じくらいの背丈になっておしゃべりしたり、遠目からあの人のことを見て高揚してみたいものだわ」

「いつでも代わってあげたいよ」

足音がやってきた。

心も体もどつと熱くなってもう心臓が騒いだからの中からそわそわしている。あなたを一目見たいからここでパソコンを一人パチパチと叩いていたなんてばれてしまえば、もうあつあつのウインナーのように弾けてしまうだろう！

「今日はネクタイをしているんですね、何だか

いつもと違って見えますね」

私よりずっと大人で何だか少し寂しいようなあのひとを目の前にしたら、そんなちっぽけな言葉をどうにかしてかけてみよう、と構えていた自分にどうしようもなく落ち込んだ。

「たいしたことない言葉なのに、一寸だけ幸せなその先を期待していたんでしょ」

「水を差すようなこと言わないでくれないか。」

そんなことはないよ、ちっともそんなことはない」

「図星なのね」

「……………」

もう帰ろう。今日はきつと間違いだっただ。

ああ、どうしようもなく悲しくてみじめだ。

「どうしちゃったの、こんなに頑張ってたじゃない、私もう待ちくたびれちゃったわ」

詰将棋 囲碁 解答 (出題30頁)

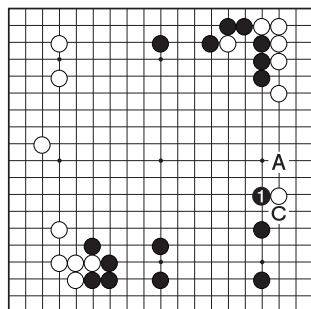
【詰将棋解答】

- ▲ 3 四飛
- ▲ 3 二飛成
- ▲ 4 三角成
- ▲ 4 二銀まで七手詰
- 2 二玉
- 同玉
- 4 一玉

【次の一手解答】

正解B 黒1が下辺から中央にかけての黒模様を拡大する、この一手。

- A 方向違い。
- C 次善手。



「さっきのあのひとを見たでしょう。とても声なんてかけられないよ。それより穴でもなんでも出してほしい気持ちだよ、それか塩でも振って限りなくわたしのこと縮こめてくれないかな」

「訳の分からないことを言っていないで、ほら、もう待てないわ。もじもじしていったってほじまらないでしょう」

「そのセリフ、聞き飽きたよ。そんなこと、私

もわかってるの」

「あなたはあなたが思っているよりも少しばかり魅力的よ、きつと。ほら、今日こそは」

ぱちつと目が合った。

あのひとが私を見ている、今、この瞬間、この途方もない世界であのひとが私だけを見ているという事実が、なんだかきせきのように思えて、からだじゅうから幸せがみなぎるようだった。今までの幸せとは一体何だったのか、そんな衝撃がからだを駆けていった。

初めて私の言葉に声をあげて笑ってくれたときは、何だか驚いて、心の遠くからぼつとあつたまるような、ややもすると汗ばんでしまうような気持ちだった。あのひとの笑い声がある世界のその瞬間は、ほんとうにあたたかい。と直

感的に感じた。

それは今でも変わらず、なににも代えがたい、と感じる。べただけれど、本当に愛おしく、いつまでもひとりじめしていたい。今日もきつと彼を笑わせたい、そう思って、たとえながら彼の隣を歩ける、この瞬間すらも愛おしくてたまらない。彼は、静かな海のような人だが、私の世界を、初めてこんなにも波打たせた人でもある。しかし同時に、世界がこんなにも素敵で、こんなにもあたたかいものなのだと、今でも教えてくれる人だ。

「きれいだね」

線香花火みたいな夕日が、ずっと暮れなければいいのに、と思った。